

日常的な会話における説明の表現

——説明の文脈の組織化と相互作用における機能——

野村 眞木夫

0. はじめに

説明の表現は、テキストの送り手とその受け手とのあいだで共有知識を増加させながら事態の確証の度合いをたかめてゆくことを主要な機能とする。この結果、送り手にたいする、あるいはテキストにあらわれる主体にたいする受け手の共感の度合いがたかめられたり、説明の表現の近傍の文脈が再構成されたりする（野村（1993b））¹。このことは、テキストが書き言葉であるか話し言葉であるかにかかわらず、説明の表現の発揮する文脈効果としてとらえられるのだが、話し言葉、とくに日常会話は話し手と聞き手との相互作用としてその文脈が展開されるという特性を内在している。野村（1993b）でも、会話にあらわれる説明の表現を参加者の相互作用によってとらえようとしていたのであるが、中心的な問題としてとりあげるにはいたらなかった。

そこで、本稿では、つぎの二項を問題として設定する。

- 1 日常会話において、説明の表現をふくむ文脈が、参加者の相互作用によってどのように組織化されるのか。
- 2 参加者の相互作用としての通達のなかで、説明の表現が、どのような機能を、どのような様相ではたしているのか。

この問題をかんがえるために、まず、説明の文脈における会話の参加者の相互作用のありようを観察する。これをとらえたうえで、話し手と聞き手の知的な関係において、発話のはたす機能の貢献度や共感の通達のありようについて、さらに問題を提起する。

会話における説明の文脈の組織化

1 説明の文脈のまとめりとその構造

野村（1993b）では、説明の表現の機能をとらえるための作業仮説として、つぎの三項目を提示した。

- 1 テキストの文体に応じて説明の表現に制約が生じる。
- 2 会話にあらわれる説明の表現は参加者の相互作用によって組織化される。
- 3 説明の表現はテキストの展開において期待される文脈効果に機能するよう調整される。

本稿の問題に直接関与するのは仮説 2 と 3 である。仮説 2 は、そもそも会話が参加者の相互作用で構成されるのであってみれば、仮説としての抽象度がたかすぎるため、詳細をさらに問う必要が生じる。そこで、参加者の相互作用のありように応じて仮説 3 を

課題として設定し、その実態を調査することがもとめられるのである。

まず、日常会話において説明の文脈がどのようなまとまりを形成しているのか、わかりやすい例をあげよう。

- (1)1A いない時ねらっちはいってくるとかっていって、
2B (1.5) でもいない時ねらっちはいってきてんのがどーして、いないのにわかるんだー？
3A { 1 } あー、でーそのときー、ほらお酒とかタバコとかみっかっ//てー持ってかれるからわかる。
4B んーんーんーんー(0.5) { 2 } そっかー。
5A どっちもどっちだよねーなんか。

2B は 1A で提供された情報に関する根拠を問いかける発話で、「でも」が疑問をいただいていることを通達し、「どーして」が説明を要求する語彙的な標識になっている。3A がこれに応じる説明の表現であり、「から」がそれを明示する標識である。4B の末尾の「そっかー」は、3A を 2B に対する説明の表現として了解したむねを A に通達している。5A は 1A と 3A で述べた事態に関与する人物に対する批評であり、これまでの話題は維持されているが、説明の文脈としては機能しない。説明になんらか機能する発話は 4B までとみなしてよい。

- (2)1C あたしそーいえばー、11月までお金ないの。
2D (2) なぜに、=
3C =インカレ行くから。
4D こんどインカレどこさ。
5C 仙台。
6D また。

1C は「そーいえばー」によってあらたな話題を提示することを予告したうえで、「11月までお金ない」という情報を提供している。2D は 1C で提供された情報に関する理由を問う発話であり、3C がこれに応じる理由説明の表現である。2D の「なぜ」と 3C の「から」がこの関連性を語彙的に明示している。D はこの説明に対して、それを了解したという(1)4B に該当する発話をとくに明示的にあたえてはいないが、3C の発話にある「インカレ」を、4D であらたな話題としてとりあげていることから、3C を 2D の説明として了解したことをあらわす機能が、4D にわりあてられる。それゆえ、この会話のまとまりは(1)と同様の展開をみせているととらえることができる。

- (3)1A で御飯、おかずすごいとぼしくなったのさー。
2B (0.5) えっ？

- 3A なんかー(0.5)なんか人件費がかかりますからーとかっていって(0.5)掃除のおばさんとかやとっ//た。
- 4B あーそっかそっかそっか。

(3)では3Aが1Aにかかわる説明の表現とみなされるが,(1)2Bの「どーして」や(2)2Dの「なぜ」のような,説明の要求に関する語彙的な標識が欠けている。しかし,会話の展開から,(1)2Bと(2)2Dに相当する発話としては,意外性を表出する(3)2Bの「えっ」がとりだされる。2Bは1Aの発話内容が十分理解しうる情報ではなかったために,この表現をおこなったと解釈されるが,この会話の展開では2Bが説明をAに要求する発話として機能し,そのあとの3A・4Bの展開は(1)(2)のばあいとおなじく,説明とその了解の発話としてとらえられるのである。

以上の三つの例を観察したところから,会話の参加者の相互作用として,つぎのような説明の文脈の展開するまとまりをとりだすことができる。

- (4)1 ある話題の情報提供に機能する発話
- 2 1の話題に関連する説明要求に機能する発話
- 3 説明に機能する発話
- 4 説明了解に機能する発話

すなわち,はじめの情報提供は説明の文脈の話題を提示する機能をにない,これを予備的な表現として,以下その話題との関連性を維持しながら,説明の文脈が展開し,これを了解したことが表現されたとき,説明の文脈としてのまとまりが成立し,これと同時にその説明の文脈が終了するのである。

(4)は,説明の相互作用に關与する発話のまとまりの構造として仮定されるものである。これを狭義にとらえて,説明の隣接ペアをとりだすならば,さしあたり(4)2と3の連鎖がそれに該当しよう。この2・3の部分については,それぞれ一定の表現類型がすでに指摘されている(野村(1993b))。しかし,(2)(3)の例などは,この隣接ペアの部分だけに着目しても会話における情報のうけつがれかたが明確になるわけではない。それゆえ,説明の相互作用は先行連鎖(Levinson(1983)345ff)として,すくなくとも(4)の1を視野にいれなければならない。また,説明が正常におこなわれたばあい,これを了解したことを通達する表現が(4)4の位置にみとめられるのであるが,隣接ペアとして(4)の3と4の連鎖だけを取りだしても,やはり説明の範疇のとらえかたとしては十分といいがたい²。(4)を,全体として,説明の文脈のまとまりとみなすゆえんである。

2 説明に關与する発話に対する機能の割り当て

さて,われわれは,(4)を日常会話における説明の相互作用の構造的な仮説として,その有効性を検討しなければならない。そのためには(4)の四つの項のあるものが構造的な変容を呈していたり,曖昧であったり,あるいは表面的に生起していないばあいな

どをとりあげる必要がある。

はじめに，説明の発話が物語の規模で展開する例を観察しよう。

- (5) 1E 家庭事情が事情だったからぐれてたんだようちの父親。(1)しかもさー Z
(筆者注：高校名)だったんだけどさ，先生ひとりやめさせたんだって。{ 1.5 }
- 2F でも私もやった。
- 3E 信じられない。
- 4F 中学//の，
- 5G ことごとく反抗した。
- 6F 中学校の時に胃潰瘍でやめてしまったその先生。
- 7EG { 3 }
- 8E かわいそー家庭あったんだよその先生きつと。
- 9F いやでもほん本人しん，新任の先生だったの。
- 10H んー。
- 11F で数学の先生だったんだけどー，なんにもおこって，やってないのに私ばっかおこんのさ。であたまにきてー，でそのうちみんな授業でなくなってきちゃってー，でその先生が胃潰瘍んなってー，6月の末あたりから入院したのよ。(1)夏おわったときに，もー，きょー，最初から教師になりたいんじゃないんじやなくて親が教師やってたからー//，Y大のー教育学部ってそのままなったからって，だからやっぱり本当，自分のやりたかったコンピュータの方の道に進みますって(1)ゆってー，やめてったの。//(1)ちょっと罪悪感を感じた中学校 2年であった。
- 12H んー。
- 13E はー。
- 14E {0.5}すごいなー中2で。

当該の発話が物語としての属性をもっているかについては，さしあたり，これまでの物語の概念規定に依存して (Thorndyke (1977))，状況設定とある話題の提示，その展開としてのプロットおよび解決，という構造をみだしていることを基準としておく。(5)のばあい，Fの一連の発話が物語としての構造をそなえている。すなわち，全体の話題は 1Eによってあたえられた「先生をやめさせたこと」であり，Fは 2Fから自分の経験にその話題をむすびつけようとする。Fの発話は，2Fから 4F，6Fが状況設定と話題の提示に相当し，9Fと 11Fでプロットが表現されている。11Fの最後の部分が物語全体にたいする解決としての評価である。

さて，3Eは 2Fで提供されたあらたな話題の情報にたいする意外性の表出，8Eがあたえられた情報を批判的に評価する発話であり，この二つが説明要求の表現として機能する。Fの発話は，その話題を物語的に展開させたもので，説明の表現として機能している。14Eがこの説明全体についての了解の発話として機能する。説明の発話の規模がこ

れまでの例よりもおおきく，11Fの発話の継続するあいだには明確なあいづちとして認知できるものがすくない。それゆえ，11Fの継続する範囲では参加者の相互作用の様相がよわくなっている。しかし，(5)を全体として観察すると(4)の四つの要素は完備しており，説明の文脈の展開のまとまりとしては条件をみたしているのである。

つぎに(4)の2，すなわち説明要求に機能する発話が不完全であるばあいに注目しよう。

- (6)II 「なんかのせせらぎは」とかすっごいなんかこー(0.5)ねーひたってるんだよね。(0.5)んでときどき(0.5)ふーっとこー陶醉しきっていなくなるのー。{3}
- 2J ここにこー彼はいないのねー？
- 3I そーいないのー。もー，こころーここに//あらずって感じで，
- 4J あらずー，
- 5I {0.5} Xーかえってこーいって感じ。{3}
- 6J 名前きにいったそれー。

(6)は，大学の講義中に自作の詩を朗読する教員Xの様子が話題である。その2Jは，IIの描写の表現の後半であたえられた情報を部分的に反復して，Iに確認としての説明を要求するものと解釈される。3Iはこれを肯定しながら，その後半で換言することで説明している。4Jは，3Iの説明の表現の一部を同時に発話しているところから，これを了解した発話として機能しているとみなすことができる。4Jによる了解の発話が3Iに割り込むかたちでなされたのは，説明としての「こころここにあらず」が慣用的な表現で，予測しやすかったことに起因しよう。

ここで2Jには(1)2Bや(2)2Dのような説明の要求に関与する語彙的な標識はふくまれておらず，また(3)2Bや(5)3Eのような意外性を表出する表現でもない。しかし，3IはIIを補足的に説明しているのであり，この展開において2Jは説明を要求する発話として機能している。すなわち，説明を要求する発話は，そのように解釈するための構造を形式的に規定することが困難であり，会話の相互作用の展開においてどのように機能しているかを割り当てることによって，はじめて解釈することができるのである。

(6)は説明にかかわる発話の連鎖が(4)の構造に一致するのであったが，連鎖の一部が表面的には欠損するばあいがある。つぎにその例を検討しよう。

- (7)1B わたし英文学ってわかんないんだよなー。
- 2A (1)あわたしもわかんないけど，あーなんだっけメリーポピンズー？ //(0.5)わたしビデオみたのねー？ //なんか(0.5)先週だったかすっごいつまんなかったー。
- 3B んーんーんーんー。
- 4B んーんーんーんー。
- 5B あれだってビデオじゃおもしろくないもーん。
- 6A (0.5)じゃ，それに長いしさつまんな//いのにー。(0.5)でその//あと()

7B んーんー。

8B あれはよっぽど思いいれがないと，なんかおもしろくないぞってゆー，

9A メリーポピンズと一休さん借りてきてたったのねー？ で，早く一休さん見たいねーとかってゆって，でまだなんか歌ってるよーとかつて，

10B { 2 }

(7)では2Aで1Bの発話の話題(英文学)に関連する話題(メリーポピンズのビデオ)があらたに提示されている。ここで，2Aの情報に対する説明要求を明示的に表現する発話はみとめられないのであるが，5Bは「だって～もん」という要素から，2Aの「つまんなかった」という否定的な事態の理由を説明する発話として解釈される(「だって」についてはMaynard(1993a, b)を参照)。6Aは5Bの説明をさらに補足する発話であり，この意味で5Bの説明は了解されている。7Bで6Aの説明を了解したことが通達され，さらに，8Bはそれまでの説明をもう一度補足した発話である。

このようにとらえると，(7)には(4)の2に相当する発話が表面的にはあたえられていないことになる。これまでの例では，はじめの情報提供をおこなう発話者と説明をおこなう発話者とが同一であった，すなわち(4)の1と3の発話者が同一であったのだが，(7)でそれがことなっているのもこのこととかかわりをもつ。

さて，このようなばあいの一つのとらえかたとして，Francis and Hunston(1992)をとりあげよう。彼女たちは，「開始発話 - 応答 - 補足」という発話交換の構造を前提にしながら，「期待される応答が生じないにもかかわらず，発話交換が完全になされるばあい」を規定する。それは，第一に，参加者の一人が縮小された発話権しかもっておらず，ただそこにいるというだけで情報を傾聴しているとかんがえられるばあい，第二に，期待された応答が実現されなかったとしても発話交換が完全であり，それに先行または後行する発話によってその応答が含意されているばあい，の二つである。

このかんがえかたにあてはめるならば，(7)は第二のばあいに相当することになるのであるが，はたして，彼女たちのような「含意」という範疇による説明が適切であるかどうか，検討の余地があるう。

本稿の筆者は，さきあげた仮説3をもってつぎのようにとらえる。すなわち，(7)の1Bから2Aにかけての会話の展開において，参加者Bは，2Aの上昇するイントネーションの発話の直後に了解を意味するあいづちをうちながら，2Aの発話に「つまんなかった」ことに対する説明要求の機能を割り当てた。そこで，それに応じる説明の機能を，自身の発話5Bに割り当てようとして，2Aの表現と語彙的に結束性のある，文脈効果のたかい表現を選択して，関連性をたかめようとした(Sperber and Wilson(1986)参照)。これがBによる表現の調整である。このばあい，Aの発話にBが割り当てた説明要求の機能は，Aが意図している必要はない。すなわち，発話にその機能を割り当てた責任は，発話の送り手ではなく，受け手の側に帰属する。したがって，ここに論理的な含意関係が成立する必然性がなくなる。それゆえ，2Aの発話は，説明要求の機能を含意するととらえるのではなく，(4)1の情報提供と(4)2の説明要求とのふたつの機能を多重的に

になっている，とかがえるのである。

なお，先に指摘したように，(7)にみえる説明の文脈は，二人の参加者が相互に説明を補足しあって展開させている。この意味で，会話における説明は，一方的に情報をあたえるだけではなく，協力的に共有知識を増加させる相互作用でもあるわけである。

また，表面的には説明の文脈が展開しているのだが，その一部が別種の発話機能になうばあいがある。

(8)1C (筆者注：弓道の試合を) 雨ふってもやるからやだよ。 =

2D = あ雨ふってもやるのー？

3C 雨ふってると的みえなくなるんだよ。

4D でしょーねー。んー。

5C = んー。だからあれやなんだけどさー。

(8)では 1C で弓道の試合を雨天でもおこなうことを話題にしている。2D は，表面的に解釈するかぎり，1C の情報にたいして単に驚きを表明したか，あるいはその情報に関する認否を確認するかのふたつである。しかし，5C の「だから」からさかのぼって 3C を解釈すると，3C は 1C の情報に関する説明の表現であり，したがって，C は 2D の発話に説明要求の機能を割り当てていたことになる。3C は，1C と整合する情報であるから，2D が認否の確認としても機能しているとすれば，これを肯定する情報を提供する機能を同時にになっていることになる。説明を理解する機能は 4D に割り当てられる。

このように，(8)の 1C から 4D の相互作用は，情報の確認にかかわる質疑の相互作用であると同時に，(4)の 1 から 4 に対応する説明の文脈の諸機能をもになうわけである。

以上，本節では，つぎの四つのばあいを観察した。

(9)1 説明の発話が物語の属性をもっているばあい

2 説明要求に機能する発話が一定の表現類型に該当しないばあい

3 説明要求の機能が話題の情報提供の発話に割り当てられるばあい

4 説明の発話に説明の文脈とは異質の発話機能が割り当てられるばあい

このいずれにおいても，本節でとりあげた例では，(4)で仮定した説明の文脈の展開する構造を完備しているのとらえることができた。このことから，(4)を日常会話における説明の文脈の基本的な構造とみなしてよいとおもわれる。また，発話はかならずしも単一の機能だけが割り当てられるのではなく，機能を多重的になうばあいがあることをあきらかにしてきた。

説明の相互作用における発話の機能的な様相

説明の文脈が組織化されたとき，その発話に(4)の機能を適切に割り当てうることは前節で検証したが，(4)の構造に対応してさえいれば，任意の発話に形式的に，また均

質的にその機能を割り当てることができるのであろうか。機能が多重的に割り当てられるとして、その複数の機能の共存のしかたがどのようなものであるのか。また、説明の表現が会話の参加者の知識や主観性にどのように関与しているのか。本節ではこのような、発話のになう撥能の様相を考察する。

． 1 説明にかかわる発話の機能の多重性の様相

本節では、発話に機能が多重的に割り当てられているばあい、その機能的な貢献度がどのようなものであるのかを、(4)の 2 と 3 に対応する発話それぞれ一例について観察し、問題点をあきらかにする。

(10)1B あのへんねーいーもんねー。ちょっと遠いけど、

2A (0.5)んー。(0.5)でも W(筆者注：学生寮の室番号)はもっといーんだよー。
{1.5}

3B そりゃーそーでしょーよー。//あんだけ広げりゃー、

4A だって階段のぼる(0.5)階段のぼる必要がないんだもん忘れ物してもすぐもどれるし。＝

5B ＝んーんー。

この会話では学生寮の部屋の評価が話題になっている。説明に関連する話題の情報提供の発話は 2A であり、これは 1B の発話内容にたいする反論としておこなわれている。このことは「でも」が標識となる。さて、説明の表現 4A は、3B の前半のみを聴取して発話されている。(4)2 の位置にあたる 3B の前半は、しかし、2A の情報を了解したことを表現する発話であり、語彙的にも説明を要求する標識をそなえていない。しかし、会話は、A が 3B に説明要求の機能を割り当てた(4)の構造で展開しており、事実 5B は語彙的な標識としても、説明を了解した発話として機能する。

このようなばあい、説明の相互作用は、形式的には満たされているのであるが、ある部分の表面的な、たとえば語句の水準での、関連性が希薄になる。この例では、(4)の 2 と 3 に対応する(10)3B と 4A の関連性がそれである。ここでの 2A から 4A への展開は、むしろ A の一方的な情報提供であり、3B はその 2A から 4A への発話の連続を維持しやすくさせるはたらきかけを、すぐれてになっていると解釈されるのである。要するに、3B には説明の文脈における説明要求の機能と、会話を維持・推進させる機能を割り当てることができ(野村(1993a))、その機能的な貢献度は後者のほうがたかいと解釈されるのである。

(10)からは、説明にかかわる発話に機能が多重的に割り当てられていても、その機能がかならずしも対等ではないことが主張できる。この、会話を維持・推進させる機能は、参加者のあいだでの会話の通達的な水準にかかわる範疇であるが、つぎの例から、説明の発話が反復されるばあい、ただ、聞き手の知識を増加させる機能をくりかえしているだけではないことをあきらかにする。

- (11) 1K (筆者注: Kの妹の勤務するホテルに) 巨人軍よく来んだよ。おっとし(0.5)
おっとし来たもん。
- 2L 一軍?
- 3K んー。
- 4L = 本当//に?
- 5K なんか V とー, 八戸にー, 友達の人が出てー//, でーよく来るんだって, 八戸に。
- 6L んー。
- 7L へー?
- 8K でーうちの妹サインとかー(0.5)もらってきたりカメラとか持ってってね(0.5)なんか, 写真とったり, してたよ。
- 9L へー//ー。
- 10K あるもんだって, 写真とか。
- 11L U来ないのU。

この会話の全体の展開はつぎのようである。1Kで「巨人軍が来る」という話題が提示され, これに関する質問 - 応答が 2L-3Kで展開しているが, 4Lで応答の内容に疑問が呈されたため, 5Kで受け手の知識を増加させる説明がおこなわれる。しかし, これにたいする 7Lの発話も, 説明の了解ではなく説明の要求として機能し, 8Kでさらに説明の発話がくりかえされる。9Lの反応も, かならずしもその説明の全面的な了解をしめすものとして機能せず, 10Kで説明が補足されている。これにつづく 11Lは, 別の話題を提示しており, ここにKの説明にたいする了解の機能が割り当てられる。

したがって, 大局的にみると(11)は(4)の構造をみたしているのであるが, それでは, 5K・8K・10Kの説明の表現の反復が機能的に均質であるのかどうか。三つの発話は, いずれも説明の受け手の知識を増加させることに機能しているのであるが, その過程はつぎのようである。すなわち, 5Kの説明だけでは, 1Kから3Kにいたる情報にたいするLの了解がえにくいため, Kは8Kで「サインをもらう」とことと「写真をとる」とことの二つの行為をあげて, その確証の度合いをたかめようとする。10Kでは証拠としての写真そのものの存在に言及して, さらに確証の度合いをたかめようとする(野村(1993b))。すなわち, Kの一連の説明の表現は, 順次, 確証の度合いをたかめる機能を強化しているものであり, この点で5K・8K・10Kの三つの発話は機能的な相違があるととらえなければならない。すなわち, 機能の選択圧が変化するということである。

このように, 機能は発話に多重的に割り当てられうるのであるが, その機能相互の関係や, ひとつひとつの機能の貢献度は一様ではないのである。

2 説明の表現の通達的な機能の様相

つぎに, 説明の表現がその参加者, すなわち説明する, あるいは説明される主体の知

識や主観とどのような関係にあるのかをとりあげる(樺島(1990),土部(1993)参照)。その関係のいかんに応じて,説明の表現が会話の展開において,参加者相互にはたす通達的な機能がことなるとかんがえられるからである。

すでにあげた例で示すと,(5)のような物語的な発話は,相互作用の様相がうすく,その物語の部分全体が,知識を受け手に提供する独立性のたかいテキストを構成している。(5)のばあい,時間軸にそった一連のできごとの,客観性のたかい報告になっている。

物語の規模にいたらない例をあげると,(1)3A「そのときー,ほらお酒とかタバコとかみっかってー持ってかれるから」,(2)3C「インカレ行くから」,(3)3A「人件費がかかりますからーとかっていって」,(11)10K「あるもんだって,写真とか」などのばあい,動作や作用の客体的な情報が説明の発話を構成している。このような説明では,説明の受け手にたいして知識を提供し,その結果,送り手とのあいだの共有知識を増加させるという機能がすぐれてはたされることになる。

それに対して,(6)3I「もー,こころーここにあらずって感じで」は,話題の人物の内面にかかわる情報について,説明の送り手のたちばかりから解釈をくわえた表現で,(1)~(3)および(11)の例のように動作・作用を外面的に表現したものと異なり,通達される情報の質を異にする。これは話題となっていることからの素材の相違にも依存し,(6)では人物の感覚に關与する情報が話題になっているのである。

つぎに,説明の送り手の感情を表現する例をあげよう。

(12)1A でー毎朝おそば食べてんのさ最近。

2B (1)えー。

3A なんか,んー,ほんとに御飯たべたくなくてー。そしたらなんか,食堂のおばさんが,ある日はなしかけてきたのねー。//で Aさんとかって言って,あんたいつもそ,そば食べてるねーって,朝? 食べてるねーとかつつて,それヌードルダイエットー(なのって言った)。

4B んー。

5B あるのー? そんなのー,

6A 知らない。

(12)では3Aの「ほんとに御飯たべたくなくてー」が1Aの話題にたいする理由説明であるが,これは説明の送り手自身の願望を表現するものである。また,(7)5B「あれだってビデオじゃおもしろくないもーん」,8B「あれはよっぽど思いいれがないと,なんかおもしろくないぞってゆー」のふたつは,対象についての感情的な価値評価を表現する発話である。これらは,説明の受け手の知識を増加させるというよりも,むしろ,説明の送り手の主観に帰属する情報をあたえて,受け手の共感をえることで説明を成功させる,といった通達の方略があるととらえることができる。

さらに,野村(1993b)でも提示した例であるが,つぎの相互作用は,説明の受け手

のたちばへの共感によっている。

(13) 1E 女らしくといーながら今日ものっぼさんのかっこーして//, 親にいわれたのまたそんな変なかっこーしてーって(2)//あんたいーかげんにねーって。

2G ふん。

3G だって楽なんだもん//, (0.5)だって楽なんだもん。

4E 楽だよねー(0.5)楽だよねージーン楽だよ。

ここでは, 3G が説明の表現である。G は説明を要求する機能を 1E の発話に引用された「親」の発言に割り当てながら, E のたちばにたって, E がその服装をえらんだ理由をのべている。それは, 感覚を意味する「だって楽なんだもん」という表現によっており, 説明の受け手である E への共感の度合いがたかい。そうして, この例のばあい, E は「楽だよねー」という, 3G に関連性のたかい表現をつづけることで, これを了解した発話としており, G による共感の通達は達成されたと判断できる。つまり, 3G は E の感覚をそのたちばから直接に描出した表現での説明であり, (1)~(3)や(5)のように, 説明の受け手に知識を通達し, ただ送り手と受け手のあいだでの共有知識を増加させることにすぐれて機能する説明の表現とは, 対極をなすのである。

こういった, 説明の表現のもつ通達的な機能の変異の様相は, ただ当該の発話の意味論的な構造にのみ依存して生じるのではない。たしかに, 説明の表現だけを取りだしてみるならば, たとえば, Sperber and Wilson (1986: 224 以下) が主張する言語使用の「描写的な次元と解釈的な次元」の区分, 樺島 (1990) が描写的表現のあり方について設定した二つの軸としての「客観的 - 主観的」と「描写 - 説明」の相関関係, あるいは土部 (1993) の「描写・記述・説明・評釈」という叙述の区分などにあてはめることで, 解決できそうである。しかし, (4)で仮定したように, 説明の文脈は, もとより一つの発話だけで完成されるのではなく, また, 説明に直接関与する質問 - 応答の隣接ペアだけで充足するのでもなく, すくなくとも話題の情報提供から説明の了解までがひとつのまとまりを形成するのである。その文脈にあらわれる発話のになう機能の変異には, 説明の対象である話題がこういった素材であるのかが制約をもたらし, また説明の表現にたいする受け手の発話が十分な了解として機能しているかどうか, 送り手のつぎの局面の発話を左右するのである。

整理

以上, 日常会話における説明の表現を会話の参加者の相互作用とのかかわりで考察した。 , でのべてきたことを整理するとつぎの四項になる。

- 1 (4)の構造の有効性を確認した。
- 2 説明要求と説明の発話の類型性と機能を隣接ペアより広範な文脈の展開のなかでとらえた。
- 3 2にともない, 発話が機能を多重的にになうととらえ, 機能の貢献度も一様で

はないことを示した。

- 4 説明の表現がはたす通達的な機能とその様相の多様性をとりだし、すぐれて知識増加に機能するものや、共感度を高めることに機能するもののあることを示した。

説明に関与する表現は、語彙的な標識を内在するばあいやすくはないが、だからといってその表現形式をつねに予測することはできない。定量的な分析が無意味だとはかんがえられないものの、さしあたり重要な問題は、任意の表現に発話の機能がどのようにわりあてられており、またそれがどのように解釈されているか、どのような通達の機能をになっているかを分析することであり、そうしてそれらが相互作用のまとまりを形成する要因を知ることなのである。本稿は、そのための問題提起として提出するものである。

注1 野村(1993b)では、説明の機能として、つぎの六項をとりあげた。

A. 共有知識を増加させる機能, B. 確証の度合いをたかめる機能, C. 共感の度合いをたかめる機能, D. 文脈を再構成する機能, E. 説明の文脈を後退させる機能, F. 話題を構成する機能

注2 この問題については、ザトラウスキー(1993: 184ff)参照。

参考文献

- Francis, G. and S. Hunston. (1992) "Analysing Everyday Conversation." in Coulthard, M. ed. *Advances in Spoken Discourse Analysis*. Routledge.
- 土部 弘 (1993) 「『説明』の機能——シンポジウムを司会して——」『表現研究』58: 18-25
- 樺島忠夫 (1990) 「描写の構造」『表現研究』52: 12-19
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge University Press.
- メイナード・泉子・K (1993a) 『会話分析』くろしお出版
- Maynard, S. K. (1993b) *Discourse Modality*. John Benjamins.
- 野村真木夫 (1993a) 「日常的な会話における話題の転換と割り込みの機能——会話の参加者のかかわりかたをめぐって——」『弘学大語文』18. 19: 9-22
- 野村真木夫 (1993b) 「『説明』の機能——説明の表現の文脈効果——」『表現研究』58: 9-17
- Sperber, D. and D. Wilson. (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- ポリ・ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析——勧誘のストラテジーの考察——』くろしお出版
- Thorndyke, P. W. (1977) "Cognitive Structures in Comprehension and Memory of Narrative Discourse." *Cognitive Psychology*. 9: 77-110

会話の表記方法

// したの発話と//部分でかさなる。ひとつの発話に2個以上//あるばあいは、順次、したの発話とかさなるものとする。

= = の連結する発議のあいだに時間的な間隔がみとめられない。
。 下降するイントネーションで発話が終了する。
? 上昇するイントネーションで発話が終了する。
, ごく短い息つき, および, 文法的に終止しない形態での発話の終了。
(n) n 秒間の沈黙。
{ n } n 秒間の笑いなど非言語的な音声の継続。
() 聞き取り不能, あるいは不明瞭な発話。
長音は「ー」で表記する。
アルファベット大文字は特に注記のないばあい人名を意味する。

会話の参加者・出身地

A : 大学 3 年生 女性 岩手県 E : 大学 2 年生 女性 青森県 I : 大学 4 年生 女性 青森県
B : 大学 3 年生 女性 岩手県 F : 大学 2 年生 女性 北海道 J : 大学 4 年生 女性 青森県
C : 大学 3 年生 女性 青森県 G : 大学 2 年生 女性 宮城県 K : 大学 2 年生 女性 青森県
D : 大学 3 年生 女性 青森県 H : 大学教員 男性 東京都 L : 大学 2 年生 女性 青森県
参加者の学生はそれぞれ親しい友人の関係にあり, H は学生の所属学科の教員である。

付記

資料の記録には, アナログカセットテープレコーダー, DAT レコーダー, 8 ミリビデオカメラを併用した。ただし, 今回, ビデオテープによる記録は, 発話者の特定が困難なばあいにのみ使用した。参加者は 90 × 180cm のテーブルの長辺に着席し, テーブル中央にフラットマイクロフォンを 2 個おいてある。ビデオカメラはテーブルの短辺から約 2m の位置に設置し, マイクロフォンをテーブル短辺においた。

『弘学大語文』20 : 1-13 (弘前学院大学国語国文学会 1994 年 12 月)

雑誌掲載時の誤植は訂正してあります。また掲載時とレイアウトに変更があります。